歴教協　沖縄大会　第２１分科会「障がい児教育」レポート

「今まで自分が養護学校で実践した「社会認識を育てる授業」を整理する試み　　－自分の考えと小林幸雄先生・髙橋　誠先生のレポートのつきあわせ－　　」

埼玉県立川口特別支援学校　中学部　土田謙次
２０１６（H28）年７月１８日作成

第１部　はじめに（自己紹介・学校紹介）

・私は、１６年間中学校社会科の教師を勤めた後、肢体不自由養護学校２校に１３年間、知的障害養護学校も２校に９年勤務し、現在は知的障害校に再任用として週３日間勤務している。
・川口特別支援学校のある川口市は、埼玉県の南東部にあり、人口５０万人で、東京都板橋区・北区、足立区に隣接している。生徒数は小学部から高等部まで２６０名、という大規模校である。

・その中で、私が今年度所属している中学部は、生徒５３人、教員２１人という集団である。

第２部

１、テーマ設定の理由

私は元は中学校社会科の教員であり、養護学校（現在は特別支援学校）に転勤してからも、社会科を教えたいという気持ちをずっと持ち続けてきた。一方で、特別支援学校では、肢体不自由校の一般学級や知的障害校の高等部の学力の高い生徒達のグループを除いては、「社会科」という教科は教育課程の中に位置づけられていないのが現実である。それは、能力的に理解が難しいということや、必要がないと言った理由からと思われる。

それに対して、埼玉県川口市立鳩ケ谷中学校の障がい児学級担任だった小林幸雄先生は、２０１１年の歴教協福岡大会のレポートで、「障害者の教育に『社会科』を」と題して、次のように述べている。「…日本国憲法の人権・国民主権・平和を、教育の基本におき、そこから社会認識の課題を教育課程に設定することが必至である…」

そして私は、特別支援学校においても、それ（社会科＝社会認識の教育）は必要であると考えて、実践してきた。

一方私は、今年の３月に定年退職し、４月からは再任用で週３日の勤務をしている。そこで、今まで２２年間の特別支援学校勤務の中で行ってきた「社会科的内容＝社会認識の教育」を整理して振り返るとともに、その実践を、埼玉県の歴教協の先輩である小林先生の「社会認識の教育」に関する提言を基に、評価・反省したいと思い、このレポートを書きました。

２、レポートの内容・構成

（1）今まで自分が養護学校で実践した社会科的内容を一覧表にして整理する。
（2）小林先生の「社会認識の教育」に関する提言を自分なりに整理したもの
（3）特別支援学校においても、それ（社会科＝社会認識の教育）は必要であると考えた理由

3、レポート本文

（1）今まで自分が特別支援学校で実践した社会科的内容を一覧表にして整理したもの
→別紙一覧表　参照

＊この一覧表を作っての評価・反省
◎評価
（1）こうしてまとめてみると、２２年間の間に結構沢山の実践をしてきたと、自分ながら評価したい。特に前半の和光養護や和光南養護では「社会科」という教育課程が用意されていたものの、後半の川越特支や和光特支では、それがない中で、つまり他の教科（国語）や総合的学習等での実践であった。

（2）また、川越特支の高等部 3 年生の「ことば・かず」の授業の中で「１年間を感じさせるカレンダー作り」では、歴史・地理教育１９９７年９月号に載った髙橋　誠先生の「障害児教育における時間と空間の認識」の実践を真似て、教室の周りにぐるっと 1 年分の手作りカレンダーを張り巡らし、そこに生徒たちが体験した行事等の写真を貼って、１年間という時間を認識させようと試みた。その成果については、別表参照。

（3）また、特に障がいの重い児童・生徒に教える際には、五感に訴える授業を工夫した。例えば最後の和光特支での「ウミガメと少年」の授業では、①本の読み聞かせを聞いて、現在の平和な、異国情緒の沖縄の様子を感じる。②暗い中で空襲警報や空襲の音、砲撃の音などを聞いて、戦争の怖さを感じる。というねらいを達成するために、動画（視覚）だけでなく、音楽・音（聴覚）、沖縄のもずくのスープ（嗅覚・味覚）などでそれらを感じさせようとした。

◎反省
・表を見ると一目瞭然であるが、右側の「生徒の反応」「生徒の社会認識は高まったか」という欄が空欄になってしまっている。これはつまり、私の方で、そういう視点での資料・評価がほとんどなかったという結果である。つまり一応一生懸命「社会科的内容＝社会認識の教育」の授業はしたが、果たしてその結果、児童・生徒たちの社会認識を高められたかは？？という結果であり、これは自己満足の授業と言われても仕方ないかもしれない。

（2）小林幸雄先生と高橋　誠先生の「社会認識の教育」に関する提言を自分なりに整理したもの　　＊<u>なお、下線部は土田の考えを加えたものである</u>。

◎障がい児の「社会認識」をどうとらえるか？
＊小林幸雄先生の２０１１年歴教協福岡大会のレポート「市民性と障がい児教育…社会認識への接近」より、抜粋。

1、社会認識とは
＊「社会認識」に似た言葉に「社会性」という言葉があるが、「<u>社会力</u>」という定義も必要。
＊門脇厚司「子どもの社会力」
1、この３つの関係を整理すると…
（1）それぞれの意味は…

①「社会性」とは…「個人が存在する社会の中にあるルールやふるまい方を身に着け」「自分らしく生きていくこと」（一松麻実子「人と関わる力を伸ばす」）
＊いわゆる社会に適応する力。

②「社会力」とは…よかれと思う社会を構想し、それを作り、運営し、その社会をさらに良いものに変えていく力。その下地としての「十全な他者認識や他社への共感能力」（門脇厚司「子どもの社会力」）

③「社会認識」とは…社会の本質を十分に理解し、その物と他の物とをはっきり見分けること。

（２）この３つの関係は…
＊「社会性」「社会力」には、それぞれに量・質ともに見合った「社会認識」がある。
＊「社会性」は不要ではなく、「社会力」に突き抜ける必要がある。
＊「社会性」も、その生徒が豊かに生きていくために大切であるが、それだけに終わってはならない。（現在の状況は、高等養護学校で１００％の就職率を目指すなど、社会への適応だけを重視する傾向が強いので…）「社会性」＋「社会力」をつけることを目指して、それに見合った「社会認識」を育てる必要がある。

＊「歴史教育・社会科教育年報２００４年版」の髙橋　誠先生のレポート「障害児教育と社会科」より、抜粋。

２、育てたい力・教えたい内容

◎障害児の社会認識を育てる様々な実践の積み重ねが必要だ。
（例えば）
・今、子どもがぶつかる問題から社会認識が育つのでは？
・「昨日あったことをお話ししよう」という国語の取り組みも、社会認識の基礎作りとなる。
・障害児が疎外されていること自体が、民主社会に反している。そのことに気づくこと。
・社会に関した知識的なものを直接教えるよりも、周囲の中での自己の存在や関りに気づかせたり、友達と互いに認め合えるようにすること、また、生活や経験を通して、言葉を豊かに、正確にさせることが社会認識の第一歩。
・時間や空間の認識、平和教育、交流・共同教育など。
・「地図作り」や「自分史作り」など。
・できるだけ外に引っ張り出し、色々な人との触れ合いの中でこそ社会認識も育つ。

（全国大会のレポートや歴史地理教育に載った実践の例）
・歴史地理教育９７年９月号髙橋　誠（宮城）「障害児教育における時間と空間の認識」
・９７年宮城大会での菊池章博（宮城）「障害児の空間認識に関する指導」
・９９年奈良大会での加藤由紀（大阪）「地図学習からさんぽへ」
・歴史地理教育９６年１２月号山下洋児（東京）「障害児学級の戦争学習…ランドセルをしょったじぞうさんをきっかけに」
・04 年山形大会での小林幸雄（埼玉）「当たり前の教育（パート２）障害児学級で社会科を」
・04 年山形大会での関根千春（千葉）「資料館の学芸員を招いた勾玉作り」
・０２年三重大会での竹下忠彦（東京）「猿と人間の食べ物の違い」

＊以下詳しくは、上記「歴史教育・社会科教育年報２００４年版」の髙橋　誠先生のレポート P134 の「障害児教育分科会レポート一覧表」を見よ。

３、社会認識を正しく教えるステップを組み立てる（役割が障がい児教育分科会にはある）
＊小林幸雄先生の２０１１年歴教協福岡大会のレポートＰ５より…土田なりのまとめは…

１、つけたい力・教えたい内容

ステップ？	つけたい力・教えたい内容	指導内容
1	社会には色々な人がいること、社会には日々色々な事件が起こっていることに関心を持ち、知ろうとする力。	レディネルステストを行う。関心を持たせる。
2	人々の考え・行動や、事件には、それぞれに歴史的・地理的なわけがあることを知る力。	わけを考えさせる。 教える。
3	勉強したことを表現する力。 ＊テスト、壁新聞作り、絵を描く等。	勉強したことを表現させる。 テスト（まとめ）を行う。

２、教える方法
①絵画的なもの（視聴覚資料）を中心に見せる。
②学習後のまとめとして、絵画的に表現させる。

３、評価の方法
①初めにレディネルステスト（実態の把握）を行う。
②学習後にもテスト（まとめ）を行う。

４、教える場は…
・「社会科」の授業がある場合に限らずあらゆる場で行う。＊他の教科、行事の事前学習等。

＊なお、髙橋　誠先生のレポート「障害児教育と社会科」より、９９年奈良大会以降の障害児教育分科会は、討論の柱を明確に２つ打ち出している。
Ⅰ、障害児教育における社会科の授業実践
Ⅱ、障害児・者が地域でどのように生きていくのか
＊今回の私の考察・整理は、Ⅰの方のみである。

（３）特別支援学校においても、それ（社会科＝社会認識の教育）は必要であると考えた理由

☆なぜ、障がいの重い子ども達にも社会科的内容を教えるのか？　土田の考え

１、
・障がいの重い子どもたちが、日本の社会の中で、幸せに暮らしていくためには、色々な力が必要である。それは、考える力や色々な認識の力、自分のことを自分の力でする生活力とか、できないことは依頼できる力とか、好ましい人間関係を作ることとか、自分の好きなものを見つけてそれを楽しみに生きていくこととか、である。その中に、例えば「社会性を身に着けること」もある。つまり、色々な集団の中で上手に生きていく力であり、「社会力」もある。そしてそれらを身に着けるには、それぞれに見合った「社会認識」が必要である。

・「社会認識」の力について、具体的には、地図や色々なシンボルマークを読み取る力だったり、社会の色々なこと（社会的なニュースだけでなく、自分の好きなアイドルのこと、アニメのこと等）に興味・関心を持つ力だったり、それを見るにはどうしたらいいのかを知ること（TV やインターネットの操作等）だったり、自分の意見を人に伝える力だったり、今のクラスの友達と仲良く遊ぶ力、担任の先生とうまく付き合っていったりする力だったりす

る。そしてできれば、何かいやなことがあったら「いやだ」と言える力も必要であり、その結果友達や先生から示された「じゃあこうすればいいの？」という問いかけに答える力だったりする。

２、
・障がいを持っていても（いなくても）、子どもたちは現在の日本の社会の中で暮らしており、否応なく社会の色々な問題点に巻き込まれて、暮らしているし、これから一生暮らしていく。

・具体的には、日本の社会がバリアフリー化が遅れていること、学校教育の問題（普通学校の抱える問題＝いじめ等や、特別支援学校の抱える問題＝地域性が欠如する、健常の友達ができない等）、親や家族が抱える問題（障がいを持つ子供を育てることの大変さ、離婚や育児放棄、貧困等の問題）等々。

・その中で、まずそういう問題があることを知り（感覚的には知っている・感じているはずなので、知識としても知ること）、それをどうしていったら良いのかも考え、行動するすべも知ること。
・そして、どうしていったら良いかを考え、知り、行動するためには、日本の、自分の住む地域の、地理・歴史・公民（政治・経済）的背景も知る必要がある。

４、みなさんに伺いたい点

（１）に関して…私の実践へのアドバイスをお願いします。特に、子ども達にどういう力をつければよかったのか、自分の実践をどう評価していくのかという視点より。

（２）（３）に関して…私の自分なりのまとめや考え方に対して、どう思われるか？